

自伝として見た『僻地の旧習』

—— シチェドリンの「再生の光」をめぐる ——

相馬 守胤

まえがき

19世紀ロシア文学は、作家自身の幼年期を描いた、文学的価値の高い自伝的作品をいくつか残している。C. T. アクサーコフ¹の『家族の記録』、『孫バグロフの幼年時代』、Л. Н. トルストイの『幼年時代』等がそれである。シチェドリン (М. Е. Салтыков-Щедрин, 1826-1889) の『ゴロヴリョフ家の人々』や、最晩年の作品『僻地の旧習』も、それらに比して遜色のない自伝的名作と言えると同時に、農奴制批判的内容から見れば、ラジシチェフの『ペテルブルグからモスクワへの旅』、ゴーゴリにあてたベリンスキーの手紙、ゲルツェンの社会評論、ネクラソフの詩などとも比肩できよう。

『僻地の旧習』は、読者に語りかける論壇であった「祖国雑記」が、反動化した政府によって発行停止の処分を受けたあとで、1887年から1889年の死の3カ月前まで執筆され、「ヨーロッパ通報」に掲載されたもので、独立した素材とテーマによる短篇31章が一定の秩序で配置された、文学活動の集大成とも目すべき大作である。第1章から第6章までは、家系の概要や生家の環境、幼年時代の発育過程などを描いている。ニコノール・ザトラペーズヌィー²という主人公に語らせてはいるが、個々の記述内容は、多くの調査によって事実と全く一致する箇所が少なくないことも判明しており、自伝的要素が濃厚であることは多くの研究者が指摘するところである。

作者は緒言の中で、「時に私はそれを一人称で物語り、私にとってより便利とあれば、時には三人称で物語るであろう」(XVII, 8)³と述べ、さらに註では、「物語を進めるにあたって登場するザトラペーズヌィーという名前の人物を、私個人と混同しないようお願いする」(XVII, 7)と読者に忠告して、作者の自伝的要素は作中の主人公ザトラペーズヌィー一人だけでなく、他の登場人物の中にも投影していることを暗示している。

確かにこれは単なる自伝的作品ではなく、農奴制たけなわだった時代の僻地の地主生活と、その重圧下にあえぐ農奴の生活を鋭く観察して得た記憶に、晩年の作者の客観的評価を加えた、白鳥の歌とも言える記録である。緒言の末尾で、「農奴制の廃止によってもたらされた著しい特徴のおかげで、記憶がますます薄らぎつつある、いわゆる良き古き時代の特色を再現するためである」(XVII, 8)と述べているように、農奴制廃止後のなごりに比重がおかれた『ゴロヴリョフ家の人々』とも密接に関連をもっており、このザトラペーズヌィー家は、ゴロヴリョフ家よりも早い、19世紀30-40年代の地主一家と、それを取り巻く他の地主たちや農奴等を描いた広範な記録である。ただしゴンチャロフ、ツルゲーネフ、トルストイ等が描いた「貴族の巢」ではなくて、はるかに零細な、その故にこそ農奴制ロシアの田舎の全般的典型である「巢」を、農奴に対する強い共感と、農奴制に対する憎悪、批判精神に貫かれた記録である。

本稿においては、未来の大諷刺作家の魂の揺籃期、つまり誕生から10才ぐらいまでの幼少年期における内面的な人間形成、特に精神的成長過程と、これを客観的に観察し批判する晩年

の作者の見解を、本作品の記述内容を手がかりに若干なりともさぐってみたい。

1

シチエドリンは長短7篇の自叙伝を残している。そのいずれも極めて簡略化されたもので、作者自身も完結できなかったことを嘆いているように、本格的な自叙伝とは到底みなし得ないものばかりである。試みにその7編のうち6編をつなぎ合わせて一編にまとめてみると、およそ次のようなものとなる。

ミハイル・エヴグラフォヴィチ・サルティコフは1826年1月15日、6等文官エヴグラフ・ワシーリエヴィチ・サルティコフとその妻オリガ・ミハイロヴナのもとで、トヴェーリ県カリャージン郡の自分の父の領地であるスパス・ウーゴル村に生れた。宗教は正教。ロシア人。カリャージン郡の平民である産婆ウリヤーナ・イワーノヴナが取り上げた。スパス・ウーゴル村の司祭イワン・ヤーコブレフ・ノヴォショーロフが洗礼を施した。名付親はウグリツの平民ドミートリー・ミハイロフ・クルバートフと処女マリヤ・ワシーリエヴナ・サルティコヴァであった。洗礼をほどこす際にクルバートフは「この子供は女たらしになるであろう」と予言した。家柄は古いが、その系図については一度も研究したことがない。カリャージン郡にはいくつかの部落をともなったスパス・ウーゴル村という領地を大昔から持っていて、それはいまでも長兄の子供たちが領有している。両親はかなり裕福な地主であった。サルティコフは7才の時に勉強を始めたが、その日は1833年のちょうど誕生日に当る1月15日であった。10才までの教育は家庭でおこなわれた。6才のときに初めて読み書きを教えた先生は、農奴の画かきパーヴェルで、「字差し棒」を手を持ってアルファベットをおぼえ込ませた。その後、1834年に姉のナデジダ・エヴグラフォヴナがモスクワのエカテリーナ専門学校を卒業し、その後のサルティコフの教育は彼女と彼女の専門学校時代の学友アヴドーチヤ・ペトロヴナ・ワシーリエフスカヤという、家庭教師として当家に同居した女に委任された。その他にサルティコフの教育に当たった人は、隣村のザイツェフ（又はザオーゼリエ）の司祭イワン・ワシーリエヴィチで、彼はコシャンスキーの文法書によってラテン語を教えた。またトロイツキー神学校の学生マトヴェイ・ペトロヴィチ・サルミンが夏休みに二年間連続して招かれた。教育は概してすばらしいものとは言えなかったが、それでも1836年8月、つまり10才のとき、サルティコフは6年級に入るだけの準備が出来ていたし、同時に大学附属寄宿学校から分離したばかりのモスクワ貴族学校の3年に入れたし、そこに2年間いたが、それは学問の成績によるものではなく、年少によるものであった。

2年後の1838年、つまり12才のとき、帝室ツァールスコセーリスキー・リツェイに転校させられた。これは、モスクワ貴族学校の特権として、1年半ごとに二人の最優秀生徒を官費で編入させることができたからである。（このようにして転校させられた生徒の中には現在の文部大臣 Д. А. トルストイ伯爵も入っていた）。リツェイではサルティコフは早くも1年生のときに、かなりの文学熱をもって、詩作に熱中する形をとったが、そのため多くの圧迫を受けた。詩作と読書のおかげで教師たちの側からも、特にロシア語教師のグロズドフの側からもあらゆる追求を受けた。したがって自作の詩（ほとんどが恋愛を扱った内容のもの）を、作文に共感を持たない教育者たちに取り上げられないようにと、上着とか靴の中にまでかくさなければならなかったが、みつかったものだ。そのことは毎月の「操行」の評価に影響し、リツェイ

在学期間全体を通じてとても9点以上はとったことがない(満点は12点だった)。卒業を目前にした最後の2カ月に、みんなが満点をとったときでさえもそうだった。なぜなら、「かなり良好な操行において」と書かれてあって、このことは、後の最後の2年間における操行の総合評価が8点以下だったことを意味している。これはすべて詩が原因になっており、その後さらに加えて「粗野」、ジャケットとか制服のボタンがはずれていて、正式の帽子ではない畠から拾って来た三角帽子をかぶっていて(ついでながら、これは並々ならず難しいことだったし、一つの完全な学問をなしていた)、喫煙、その他の学校の定めに反する犯罪があった。

下級年次のうちから早くも読書が好きで、1839年からはすっかり惑溺した。リツェイの2年生からは生徒の自費で雑誌類の定期講読が許可された。当時始まったばかりの「祖国雑記」、(センコフスキーの)「読書文庫」、(ポレヴォーイの)「祖国の息子」、(ブラチュクの)「灯台」、《Revue Etrangère》が読まれていた。リツェイでは文学の影響が非常に強かった。プーシキンの思い出は欠かせなかった。偉大な詩人プーシキンの継承者たらんと夢見る生徒が、ほとんどどの学年にもいた。9年生にはウラジーミル・ラファイロヴィチ・ゾートフがいて、彼はいわば片手間に詩を作り、それらを「灯台」に掲載していたが、ブラチュクは彼を本気で第二のプーシキンと宣言した。12年生にはH. П. セミョーノフ(現元老院議員)、13年生にはサルティコフ、14年生にはB. П. ガエフスキー等々がいた。雑誌類はむさぼるように読まれていたが、サルティコフに特に強い影響を与えたのは「祖国雑記」で、それにはベリンスキーの批評文、パナーエフやクドリャフツェフ〈およびゲルツェン〉の中編小説などがのっていた。サルティコフの文筆活動がいつから始まったかはおぼえていない。初めて印刷された詩は『リーラ』で、「読書文庫」にのった。たいへん愚かしいものだが、多分1842年(または1840年か1841年)のことだと思う。それから1843年まで発表しなかったが、1843年と1844年にはリツェイの生徒でありながら、プレトニョフの「同時代人」にかなり沢山の詩が掲載された。1844年にサルティコフは、当時すでにアレクサンドロフスキー・リツェイと改称されていたリツェイを(13年生)10等官として、つまり優等生としてではなく卒業した。リツェイ卒業後いままでは、詩はもはや一篇も書いていない。

同じ1844年にサルティコフは陸軍省に就職し、1848年まで勤務した。大臣はチェルヌシニコフ公爵であった。1847年11月にサルティコフの最初の散文作品『矛盾』が「祖国雑記」に掲載された(最初の中篇小説『誤解』はネパーノフというペンネームで「祖国雑記」1847年11月号に掲載された)。その後1848年3月に『もつれた事件』を発表した。評論の執筆を始め、同時に「同時代人」にも同様に評論を数篇発表した。この仕事はワレリアン・マイコフとウラジーミル・ミリューチンを通して、クラエフスキーの「祖国雑記」と(1847年からネクラソフの)「同時代人」からもらった。以上の二つの作品は、当時存在していた秘密委員会の注目するところとなり、二月革命を機に文学を検閲したのである。サルティコフに関してチェルヌシニコフ公爵に通報があり、彼の報告によって勅命がくだされ、これによってサルティコフは、1848年4月、中篇小説『もつれた事件』が理由で、憲兵付き添いのもとにヴァトカの山地へ送られ、当地の県知事の指示のもとに勤務することとなった。サルティコフはヴァトカ県で1848年4月から1855年11月まで暮し、最初は県庁の書記として、後に知事直属の特命官吏として、最後には県庁参事官として勤務した。1855年11月ヴァトカから解放された。1848年から1856年までは文筆活動を中断。1856年1月ペテルブルグに帰り、内務大臣の特命官吏として1868年7月まで勤務し、その後リャザンとトヴェリで副知事をした。1856年、「ロシア報知」に『県物語』が掲載され始めて、サルティコフの文学活動は再開された。「同時代

人」と「祖国雑記」に、『県物語』に関する批評記事が掲載された。1857年に『県物語』が2版出版されたが、第1版は1カ月で売り切れた。この作家の見解を特徴づけるためには、次のオーケルスを指摘することができる。すなわち、『退屈』『不器用者たち』(末尾)、『乱暴者たち』『道』。しかし、1860年からちょうど1868年に至るまで、彼は殆どもっぱら自分の作品を、はじめは「同時代人」に、次には「祖国雑記」に発表し、書いては勤務し、勤務しては書いた。

1862年に退官し、1863年から1864年の間はアントノヴィチ氏やブイピン氏とともに「同時代人」の同人であった。1864年末に再び勤務し、ペンザ、トゥーラ、リャザンの税務監督局長であった。1868年に完全に官途を辞し、もっぱら文学に専念した。1868年から1883年まで「祖国雑記」の編集者であった。

サルティコフの作品は何回かにわたって12巻出版された。すなわち、

『県物語』——2巻

『諷刺散文集』——1巻

『罪のない話』——1巻

『ある都市の歴史』——1巻

『時代の兆候』と『田舎からの手紙』——1巻

『タシケントの人々』——1巻

『田舎者のペテルブルグ日記』——1巻

『横暴官僚とその夫人たち』——1巻

『思想穏健な言葉』——2巻

『穏健中正な社会』——1巻

1887年秋に出版される『人生の瑣事』を除けば、サルティコフが書いたものはすべて単行本で出版された。その他にサルティコフはさらに多くのものを書いたが、すっかり忘れてしまったし、読者たちに記憶をよみがえらせることは必要だと思わない。

評論や批評の目録は作成できないが、外国語に翻訳されたものは『県物語』(ドイツ語と英語)、『横暴官僚たち』、若干の童話、『国外にて』(フランス語)。それ以上は知らない。伝記的知識は示すことができない。目下強度の疾患に悩まされており、死を待っている。(XVII, 467-473)

以上は1887年9月1日までに書かれた6編のまとめであるが、最後の1編は死の前年の1888年か、もしくは1889年のものと見られる、「弁明書」と題する断片である。

私はいまだかつて一度も良好な健康も体力も誇ることはできなかったが、1875年以来このかた、なかなか気分が良いと言えるような日は、ほとんど一日としてなかった。絶えざる病気の発作と、現代性を扱うときの苦しい感受性は、私が背負って墓場に入る悪疾の端緒となった。

また、絶えざる仕事も黙過することができない。私の人生はすべて、最後の一瞬まで仕事のうちに過ぎたし、もはやあまりにも苦しくなった時に初めてペンを投げ出して、苦しい人事不省に陥った、と大胆に言うことができる。

最後に一言、「祖国雑記」の閉鎖と息子の病気は私を決定的に打ちくじいた。病患は四方八方から私を取り巻き、私の人生の主要な要となった……

この書き始め部分の断片は、作者の死後に発見されて、K. アルセーニエフによって「ヨーロッパ通報」1890年 №2 に掲載されたが、このあとには自分の死後発表してもらうための、晩年のつらかった人生について書き加える予定であった。⁴

『僻地の旧習』はまさにこの時期に執筆中だったわけで、回想録式に叙述しながらも、農奴制批判的内容をちりばめつつ、胸中を去来する最後の思いをこの作品に託して、遺言めいた記述を織り込んだのも当然のこととしてうなずかれる。

2

この自伝的作品『僻地の旧習』は、農奴制たけなわだった時代にロシアの田舎地主邸で生まれ育った主人公と、彼をとり巻く家族、親戚、近隣の地主たち、邸内に働く農奴、村の農民の描写が主体で、作家自身の生涯を通観した自叙伝ではない。作者自身が「緒言」の註で次のように述べている。

私のこの作品では自伝的要素はきわめて少ない。これは人生観察の集大成そのものに他ならず、そこでは他人のものと自分のものが混同されており、同時に虚構が加えられている。(XVII, 7)

主観性と客観性が複雑に入りまじった二重性、幼年時代の記憶にもとづく諸事実の回想とならんで、その内容を評価し判定するもう一人の主人公、つまり語り手ニカノール・ザトラペズヌーの仮面をぬいだ、作者自身の顔が時おりのぞく。realia を文学的に典型化しながらも、彼自身の「根と実」、⁵ つまり幼年時代の鮮明な印象と、円熟した老年に至ってふりかえった過去の批判とが混在している。ただし、彼の他の諷刺作品とは異なり、ここでは例のイソップの言葉、誇張法、グロテスク、時事的内容の隠喩がほとんどなく、トルストイをして感嘆せしめた、⁶ 外国人にも理解し易い表現を用いており、『ゴロヴリョフ家の人々』、『人生の瑣事』と並んで晩年の最高峰の一つに属する作品である。

青年期に文学活動を開始して以来、幾多の論争を重ねて来た作者は、鋭い諷刺の鋭峰を武器に、数多くの論敵と勇敢にわたりあって来た。しかし今や論争のためではなく、将来のロシアの社会史家が利用するであろう他の諸資料と並んで、自分の記録も無駄とはなるまいという自信のもとに、ただ一つの真実を吐露し証明することを願って、淡々と筆を進めている。

第26章『地主仲間』では次のように述べている。

年老いては誇張の慾望は消えうせ、うち克ち難い希望は、真実を、ただ一つの真実だけを吐露しようということだけである。まださして遠い過去のことではないが、すでに日毎にますます忘却の淵に沈みつつある過去の絵を再現しようと決心して、私は論争するためではなくて、真理を証明するために筆をとった。(XVII, 337)

1881年にアレクサンドル2世が暗殺され、反動がますます激しさを加えていた1883年末、作者は外国に何度目かの病氣療養に行っていた。この作品はそのころに構想が出来上がっている。⁷ ネクラースフに代って主宰していた「祖国雑記」は1884年4月、政府によって永久に閉鎖され、読者とのきずなをたち切られた。そこでシチェドリンは、慎重な穏健派リベラル

M. M. スタシユレヴィチが主宰する「ヨーロッパ通報」に、「よりおだやかな調子」の作品としてこの『僻地の旧習』を掲載することを考えた。そしてついに 1887 年 1 月から同誌に発表され始めた。ただし、このような過去の回想録の形をとったために、一般の読者から単なる風俗作家に墮したととられたり、緊急の課題を鋭い舌鋒で斬る態度が失なわれたととられることを危惧した。一部のジャーナリズムの評は彼の危惧を裏書きするものも少なくなかった。⁸

シチェドリンの文学活動は、その全体を通じて、農奴制とその所産に対する激しい怒りに貫かれている。それはこの自伝的作品に見るとおり、農奴制の毒が農村のみならず、ロシア社会全体を侵していたところにシチェドリンの人となり形成され、これを絶滅せねばという信念と、ナロードの心の中に「真実の勝利」がひそんでいるとの確信が芽生えた。このような信念の芽生えは、遠く幼年時代の生い立ちにさかのぼることができる。

農奴制のもたらす周囲の悲惨な現実を、通常の子供よりもはるかに早くからつぶさに、自分の眼で確実に見、鋭敏に感じとっていた。しいたげられた農奴を、侮辱された人格、「魂を下劣にする」作用におかされた人々と見ていた。粗野で悲惨な「僻地の旧習」、サルティコフ家に君臨していた偽善と「家庭地獄」の中で育った彼が、農奴制への憎悪感を早くから植えつけられ、素朴なナロードへの尊敬と愛情が目ざめ、この感情は強まって行ったのである。

私はこれによって私の心が人類愛の源泉となったと言い切ることを欲しない。しかしこの時から疑いもなく、私の家の召使たちと私との関係は深刻に変化し、またその時まで私の舌をけがしていた賤しい農奴制的な術語は永久に消えうせてしまった。この瞬間は私の世界観のその後のあらゆる骨組に対して疑うべからざる影響を与えたと、私は確信をもって断言することさえできる。(XVII, 71)

この引用文の冒頭でいう「これによって」とは、福音書から受けた衝撃を指すが、これについては次章でふれる。

数多い兄弟姉妹が「秘蔵っ子」と「憎まれっ子」に分けられていた中で、殊更早く才気、率直さ、活気を発揮した、大きな灰色の眼をしたミハイル少年（未来の作家シチェドリン）は、上の兄姉がモスクワの学校へ進学したあと、5～8 才も年下の幼い弟たちとも離れて、比較的自由に振舞えた時期があった。その結果農奴の召使との接触ももち易かったし、同村の百姓たちの顔まで全部知っていて、いろいろと質問したり話を聞いたりもしたし、自分の母と農奴とのやりとりもよく見聞していた。⁹ このことは農奴たちが置かれた状況をつぶさに観察する機会にもなったし、同時に彼らの言語に通じるきっかけにもなったのである。作中で用いられる農奴たちの会話の自然さは、この体験によるものと思われる。

ある同時代人の回想¹⁰によると、シチェドリンの態度が周囲の人々に粗野な感じを与えたのは、その灰色のけわしい眼つきだけではなく、彼が好んで用いた「純然たるロシア農民の言葉」だったらしい。彼自身の言葉に民衆の言い廻しがしみこんでいたのは、子供のころ農民たちの中で暮し、その後も地方勤務の際に民衆としばしば接触していたことによるもので、よく自分のことを「おれは百姓だ^{ムジーク}」と言っていたとのことである。友人たちの集りでも、男性だけの時は塩付けの利いた「百姓言葉」を使わずにはほとんど話も出来なかったほどで、「真にロシア的な」用語が、あれほど粗野であるにもかかわらず、芸術的で表現力に富み、鮮明で奇知にあふれていて、腹から出るようなよくとおる地声の大きい低音で、聞いている人たちはどうしても笑いをこらえ切れないことがしばしばあった。

概して私の時代には、子供たちは言葉に対してたいへん放縦であり、最悪の部類の破廉恥な言葉の辞典が、彼らのあいだで大いに普及していた。(XVII, 451)

作者自身このように述懐しているように、民衆の言語についても、習慣についても、さらにその心理についても通曉するに至ったシチュドリンについて、本稿では特に10才ごろまでの精神的成長を中心に考えてみようと思う主たるねらいは、彼の生涯を支配した精神的拠点、道義的世界観の出発点が、まさにこの幼年期に形成されたものであって、円熟期の作品で展開する多彩な論鋒の根底をなすものであり、重層的な彼のイデオロギーの最下層に、死に至るまで不動のまま持続したモラルの原石を見るからである。従って本稿では、シチュドリンの家系、先祖、両親、地主邸やそれを取り巻く近隣等々の伝記的要素を、いまさらここで改めて事実の裏付けとともに検討するものではなく、もっぱら彼の幼年期の精神的成長に強い影響を及ぼした事実とその分析に焦点をしばろうと思う。

ソ連および世界におけるシチュドリン研究のおそらく第一人者であろう C. マカーシン氏の言説¹¹にあえて異を唱える意図は毛頭ないが、ロシア人の宗教心を種々の視点から分析する試みの一つとしても、シチュドリンに与えた福音書の衝撃について一言ふれざるを得ない。

3

兄や姉たちがモスクワの学校へ進学したあと、幼い弟たちと地主邸に残された小説の語り手ニコノールは、農奴の聖像画家パーヴェルから古い書体のアルファベットを教わり、受験勉強にいそしんでいた。勘定高い商家出の母の計算によると、彼一人のために家庭教師を雇うのは勿体ないので、リャボーヴォの神父ワシーリーや、モスクワの専門学校を卒業して帰郷する姉に家庭教師をやらせるつもりでいた。ワシーリー神父がいよいよ来始める前日、彼は母から『旧約聖書からとりたる百二十四の物語』をもらっている。幼い時から祈禱文などを暗記させられていた主人公にとって、ワシーリー神父の授業は退屈そのものだったが、週三回、それぞれ二時間の授業のうち一時間は、聖職者たちの内輪話をめぐる雑談によって、多くの知識を得ていた。

孤独であり、監督が欠けていて、比較的自由にしたいことをしていたが、「この自由は私に自主的精神に似た何ものももたらさなかった」(XVII, 68)。召使たちにも主人公にも一様に重々しくのしかかっていた目に見えない力(家庭の習慣一般)の中では「なんらかの自我を完成することは不可能な雰囲気をつくっていた」(XVII, 68)。このような条件の下にあってはただ「強烈でやきつくような光の突然の出現だけが、人間の良心を覚醒せしめ、その永遠の束縛の鎖をたち切ることが出来る」(XVII, 68)。「このような再生の光は、私にとって福音書であった」(XVII, 68)。これは1834年の春、作者が数え年で9才の時のことである。その福音書とは、教科書類をひっかき廻しているうちに発見した『四人の福音伝導者に由来する読本』そのものを指しているようにもとれるが、必ずしもそう断定できない。

「ヨーロッパ通報」にこの箇所が掲載されたとき、Г. 3. エリセーエフは、幼くしてこんなにも早く明確な認識をもった人を見たことも聞いたこともないが、シチュドリンの自伝資料になるとして本人に確かめたところ、シチュドリンは「そこに書いてあるとおりだった」と答えている。¹² 以前からシチュドリンをよく知っていた A. H. プイピンも「自分自身の体験を語っていることは間違いない」と語っている。¹³ 信念をもって書いたことを否定するはずもない。

ただし 1883 年に書かれたと思われる異文には次のように述べられている。

Тем не менее, когда я впервые познакомился с Евангелием (разумеется, не по подлинникам, а по устным рассказам) и с житиями мучеников и мучениц христианства, то оно произвело на меня такое сложное впечатление, в котором я и до сих пор не могу себе дать ответ. Это был, так сказать, жизненный почин, благодаря которому все, что до тех пор в скрытом виде складывалось и зачиналось в тайных изгибах моего детского существа, вдруг ворвалось в жизнь и потребовало у нее ответа. Насколько могу определить овладевшее мною чувство теперь, то была восторженность, в основании которой лежало беспредельное желание. (XVII, 491)

Не только фактическая сторона жизнь Христа и (в особенности) его страданий давала начало бесконечной веренице образов, не только притчи, но и отвлеченные евангельские поучения. (Там же)

5 年前の原稿では上に引用したように、「言うまでもなく、原本ではなくて、口頭の話によって」初めて福音書を知ったと述べている点に注目したい。げんに次の章でふれる第 18 章『アンヌシカ』には次のような一節がある。

女中部屋では脂肪ろうそくの燃えさしが燃えているテーブルの片隅に、彼女の席がもうけられた。小娘たちは紡ぐし、アンヌシカは靴下のつくろいものをしながら、物語を語るのだった。これらの物語の主題は主として初期のキリスト教の受難者たちの英雄的な行為であった（彼女のお気に入りのヒーローは大受難者のワルワーラとエカテリーナであった）。彼女は流暢に、わかりやすく話したので、私たち、貴族の子供たちさえ、しばしば女中部屋にかけつけ、喜んで彼女の話に耳をかたむけたものだ。(XVII, 266-267)

従って「再生の光」をもたらした福音書とは、古い教科書類や安手の三文小説などにまぎれていた中から彼がたまたま手に入れた『四人の福音伝導者に由来する読本』であろうと、女中部屋でアンヌシカの口から聞いた「キリスト教の受難者たちの英雄的行為」の話であろうと、この『僻地の旧習』という作品を厳密な意味での客観的な伝記的資料としてではなく、自伝的ではあるが主観と客観の入り混った芸術作品として読む限り、問題とするにあたらない。ミハイル少年をとり巻いていた環境は、その父を論外としても、モスクワの商家出の母の精力的な経営者的実務的雰囲気支配的であって、両親の教会に対する粗野で軽蔑的態度、単に外見的、儀式的、現世利益的な宗教を見聞した彼であった。福音書から「再生の光」を受けて、真の平等と博愛に目醒めたのならば、現実におこなわれている宗教の虚偽性と偽善に目が開かれたはずである。「再生の光」を受けた印象は、シチェドリンの主観的誠実さを物語るものであって、その光を与えたものが、わずか一冊の福音書だけだったと断定すべきではあるまい。そこには晩年における作者の思索が投影しており、社会的自我の認識へのひきがねの一つであったと見るのが妥当ではあるまいか。従って以下に引用する箇所での「福音書」という語句を、象徴的な表現である「再生の光」を彼に与えた「新しい言葉」、あるいは「心の中に全人類的

良心の萌芽をはぐくむもの」と読みかえても差支えないように思われる。至らぬ臆測を続けるよりも、まず作者自身の言葉に耳を傾けよう。

私が初めて福音書を知ったとき、この本は私の心の中にももの騒がしい気持をよびさました。私は自分が自分でないようであった。なによりもまず私を驚かしたのは、新しい思想というよりも、かつて誰からも聞いたことのない新しい言葉であった。そしてひたすら繰り返し、ますます熱狂して読んでゆくうちに、これらの新しい言葉の本当の意味が明らかになり、それらの言葉の背後にかくされていた世界をおおう暗黒の幕を取り去ってくれた。(XVII, 70)

福音書を読んでそこから私が汲み取った主要なものは次の点にあった。それは私の心の中に全人類の良心の萌芽をはぐくみ、ある強固なもの、自分のものを、私という人間の奥底から喚起した点にあって、この自分のもののおかげで、支配的な生活慣習ももはやそうやすやすと私を屈従させることは出来ないものとなった。(XVII, 70-71)

一言で言えば、私はもはや無為徒食の状態を脱して、自分を人間として自覚し始めたのである。そればかりでなく、この自覚の権利を他の人々にも及ぼした。飢え、渇え、重荷を背負う人々について、私は今日まで何も知らず、牢固とした社会秩序の影響のもとに作られた召使個人だけを見ていた。ところが今やこれらの卑められ、辱かしめられた人々は光に照らされて私の前に立ちほだかり、足枷以外に何一つ与えなかった、生れながらの不正に反対して大声で叫び、生活に参加するための踏みにじられた権利の回復を執拗に要求していた。突如として私の中で目ざめた、あの「自分のもの」は、ほかの人々もやはり同等な「自分のもの」を持っていることに思いつかせた。(XVII, 71)

いわゆる『福音書』による「再生の光」は、ある日この少年を突如目ざめさせたのであるが、これは「思想」の形で説得したものではない。しかしこれを、誰しも思春期にありがちな反抗精神の高揚、自我意識が覚醒する過程の一こまと見得るほどささいな出来ごとではなく、彼の一生を支配するほどに重大な転機であった。何世紀にもわたってロシア人を教化して来た、愛と謙譲の精神を説く福音書の真髓が、この少年に対して逆の作用をしたのであろうか。ロシア古来の農村共同体をささえて来た個人の不在、キリスト教的なものから生れて来た没自我の無意識的行動と全く対立する、むしろ西欧的な、個人の尊厳の意識が目ざめたのであろうか。W. ヴェイドレが説くように、「人は下にしか、隣人の苦しみとか、自分自身の心のみじめさや孤独のなかにしか神を求めようとしなくなっ」て、¹⁴「たとえその作家がキリスト教などまるで信じていなくても、あるいはキリスト教の公然の敵であったとしても」¹⁵「かれらなりにこの同じ精神に貫かれていたのであり、この精神はその時代のエリート文化と民衆の道德生活とをつなぐただ一つのパイプであった」¹⁶と、こともなげに割り切ることが出来ようか。

次に、この作品の二重性である「根と実」の「実」の部分、つまり死を目前にして執筆していた当時の、円熟した老境の作家シチュドリンが宗教について語る言葉の中にその回答に近いものが得られよう。

きわめて熱烈な信仰心というものは、読経僧や神学者ばかりでなく、「宗教」という言

葉の意義について明確な概念をもっていない人々にも到達し得るものであると私は理解している。知能のごく遅れた、くびきによって圧迫されている素朴な人間でさえも、その人が形式的な祈禱の代りに、傷ついた心、涙、そして嘆息で一杯の胸の悩みを寺院に運ぶだけでも、自分を宗教的な人間と名づける完全な権利をもっている。この涙と嘆息は、言葉のない祈りであって、その人の心をやわらげ、その人自体を明るくする。その靈感のもとでは彼は誠実に熱烈に信仰する。(XVII, 69)

宗教的靈感は形式的な祈禱によって得られるものではなく、「言葉のない祈り」、すなわち傷ついた心と涙と嘆息によって得られ、熱烈に信ずるようになるものであって、「祈禱のあらゆる意義、すべての力は、この熱烈な精神状態の中に秘められている」(XVII, 69)と述べている。

しかし「残念なことに、私個人はそれに似たことは全く身におぼえがなかった」(XVII, 69)し、みんながやるように、一定の儀式としてお祈りをしたり、ひざまずいたりしたものの、「自分が感動しているとも、心が穏やかだとも感じなかった」(Там же)のである。家の者がみんな熱心にお祈りをしても、「祈禱の主要な意義は心の平安にあるのではなくて、一般的な利己的信念によって、祈禱がもたらすあの物質的成果に意義があったのである。お祈りすれば望みのものはなんでも得られるが、お祈りをしないと無一物のままだといわれていた」(XVII, 70)。

このような現世利益的な「キリスト教」にとり巻かれていた彼が、当時のいわゆる「宗教」に何を求め得たであろうか。

ピョートル以後急激に西欧化され、ローマン・カトリック化され、教会制度も信仰形態も形式的になると共に、ギリシャ正教が本来有していた伝統的な精神性が失われて行って、体制に近い聖職者は上流階級の仲間入りをした。また体制から遠く離れた『僻地』における信仰生活もその例外ではなく、教会の聖職者とはいえ、農奴とさして変らぬ生活を地主に依存しながら糊口をしのぐ状態であった。このような状況の中で民衆の力になりながら、民衆とともにあった修道的分離派、非改革派の、同胞に対する愛のこもった自己犠牲、沒我的パトスには、たとえンチェドリンの信条から遠くへだたっていようとも、そこに専制への反抗を見出し、社会的に貴重なものを認めていたことは前稿¹⁷でも述べた。この章の最後に次の引用を掲げ、次章においては農奴たちの世界における宗教観にふれる。

この世界には真実があり、その胎内には奇蹟が秘められていて、その人を援助しにやって来て闇の中から救い出してくれることを信じている。来る日も来る日も、魔法の力には際限のないことをどんなに信じこませようとしても、またたとえ一時間ごとに奴隷の鉄鎖が彼の疲れ果てた肉体にますます深くくいこもうとも、彼の不運が無期限なものではなく、渴望し、熱望している他の人たちと同じように、真実が彼に光明を与えてくれる瞬間がやってくることを信じている。そして、目の中で涙の源泉が渇れ、胸の中で最後の嘆息が消えてしまうまで、彼の信仰は生き続けるであろう。そうだ！魔法はくずれ去り、奴隷の鎖は地におち、光明があらわれ、闇はこれにうち勝つことができないであろう！この奇蹟を行なうものが生でなければ、死がこれを行なうであろう。(XVII, 69)

こうして父祖代々奇蹟を信じ、その奇蹟は行なわれた。すなわち「死」がやって来て、「自

由の王国へ、自由な父祖たちへと翔び立つための翼を与えるであろう……」(Там же)。

4

『僻地の旧習』第17章『農奴の群』から第25章『フェドートの死』までは、刻明に記憶をたどって描いた「召使たちの肖像画廊」であって、農奴の身の上と一体になった作者のこまやかな観察によって書きつづられている。幼時から農奴の生活を身近かに見聞し、その心情を汲んで育った上に、リャザン、トヴェーリの副知事時代、農奴解放を目の前にして高揚した気運をも、本や物語ではなく、自身の眼で見、体で感じて得た彼の経験は、ロシアの他のいかなる作家にも追隨を許さない、シCHEDリン特有のものである。この点でもスラヴ主義的な、己れの「臣民」に対する人道主義的なパテルナリズムとは対立するものである。

A. M. スカビCHEフスキーは『僻地の旧習』を、純然たるキリスト教的な愛に満ちた作品と見た。¹⁸ つまり、作者は死期を目前にひかえ、清らかな心境になって、従来扱って来た時事問題から離れ、農奴制時代の地主の風俗を、キリスト教的愛と人道性にもとづいて、おだやかに荘厳な叙事詩にうたい上げたと見ているのである。

これに対して B. キルポーチンはおよそ次のように述べている。

宗教が持っている社会的体質と社会的機能をこれほど見事にあばいたものはない。宗教はまさに奴隷たちを慰撫する手段であったし、彼らを「意識的」に従順にさせる最も完全な手段であった。宗教は旦那にとって有利だったし、来世での報償という虚妄の観念によって、この地上での不平と不従順がほんのわずかでも抬頭することを阻止していた。シCHEDリンがこの作品を執筆していたころは、悪に対して暴力で抵抗するなという説教や宣伝がたけなわだった。またドストエフスキーの社会評論や主要ないくつかの長篇で確認していたキリスト教的温順が、反動陣営によってかなり利用されていた。このようなトルストイ主義、ドストエフスキー主義の社会的源泉と、社会闘争におけるこれらの反動的な役割を、この作品は浮きぼりにして見せてくれたのである。神の審判の前では、主人と奴隷は来世において平等だという宗教的妄想は、奴隷の妄想である、と。¹⁹

ここでもまたシCHEDリン自身が描いた「召使たちの肖像画廊」を、本人の叙述に即して検討してみることにする。これら農奴の群の中でも、第18章『アンヌシカ』は宗教の偽瞞性を特に鮮かに浮きぼりにした章と言えよう。

この「心の中に親切と慈愛にあふれている純朴な」「信念のある奴隷」アンヌシカは、「奴隷の身はただ選ばれた者だけに許されている束の間の試練であり、その報いとして永遠の幸福が未来に待ち受けている」(XVII, 257) という「法典」を作り上げていた。彼女は言う。「キリスト様が賤民のために天からお降りになったのは、けがれた民を救い、自分の奴隷を祝福なさるためです。キリスト様はおっしゃいました。『奴隷たちよ、主人たちに服従せよ。さればその報いに天国の冠を恵まれるであろう』って」(Там же)

「この教理は当時農奴のあいだにかなりひろがっていて、おそらく農奴制を是認しているようでさえあった」(XVII, 258) と作者は述べている。

アンヌシカは「お情深い救世主キリスト」が、自分を奴隷として祝福してくださったから、あの世では、この世の束の間の苦悩を百倍に報いられると信じこんでおり」(XVII, 262)、「福音書や聖者の伝記から範例をひいて来た(罪なことには、彼女は宗教書を読むことが出来たのである)。そうでなくても、現行の制度の根底には無条件的な服従がよこたわっており、そう

することによってのみただ呼吸することを許されていたので、しいたげられた奴隷の鉄鎖は運命のいたずらの結果ではなくして、束の間の試練であり、その終極には永遠の天国で光明が約束されているのだ、ということを感じると、誰もかれも、まるで気が軽くなりでもするかのようだった」(XVII, 263)。

このように奴隷の来世に花冠を保障するアンヌシカも、主人の来世はどんな花冠が恵まれるか、口をとぎして言わず、主人には地獄の苦しみが待っていることを無言の裡に言っているの、来世でも特権を維持したい主人たちにはアンヌシカの「法典」はお気に召さない。

受難者の物語がつきると、もっと現代にふさわしいテーマが舞台にのぼる。無慈悲な旦那が天罰に当って、修道院に入ってスヒマ僧になり、かつてさいなまれた百姓たちの暮らしがよくなった話(XVII, 268)や、窃盗と欺瞞と強奪によって財宝を不当に手に入れた悪徳商人が同じく天罰に当り、通りがかりの巡礼者に相談した結果、罪ほろぼしに財産を奴隷たちにわけ与えたので、神の使いから「汝の罪業は許されるであろう」とお告げがあり、幸福をとりもどした話(XVII, 268-270)が続くのである。これに対して作者は、女中頭のアクリーナの口を通して、聖者ならぬ人間の辛抱にも限りがあるから、我慢しきれなくなって「自分の判断で自分のための真理を手に入れたと思うでしょう」(XVII, 268)と反駁させている。

B. キルポーチンは前掲の労作の中で、アンヌシカはいつまでも耐えしのぶ奴隷であって、もう一つの頬をさし出すトルストイ主義者、温順はあらゆる悪の万能薬と見ていたドストエフスキーの追随者、ツァーリは百姓を護ってくれるし、ナロードニキの社会主義の「基盤」を資本主義の壊滅的作用から保護してくれると期待をかけていたリベラルなナロードニキであって、シチュドリンはこのような召使たちの運命論的、終末論的迷蒙、無自覚、消極性に心をいため、いかっていた、と述べている。

第19章「マヴルーシャ・ノヴォトルカ」の主人公マヴルーシャは、シチュドリンに読み書きを教えた農奴の聖像画家パーヴェルと愛し合って、自由意志で農奴となった女で、アンヌシカ同様、自分の「法典」を持っていた。一時の愛情のために奴隷の境遇に身を沈めたが、自由を捨てたことによって聖像を裏切った償いをしなければ、この世ばかりでなく来世においても「神の呪い」を身に受けたことになるので、自分の魂を闇から救い出すため、たとえ拷問を受けても主人に服従せず(XVII, 295)、ついに初秋の夜も明けやらぬうちに首をくくって自殺をとげた。第23章『漂泊のサチール』でも、アンヌシカが病床のサチールを見舞った時の言葉に、自由を売った罪を裁かれるだろう、「自分の自由を売るより重い罪はねえ。どっちにしたって、自分の魂を売ったと同じだよ」(XVII, 312)と、自由を捨てた罪をくやんでいる。アンヌシカは高令に達して修道院で息をひきとるときに、「やれやれ有難いことに、天帝は私に恵みを垂れてくださった。私は奴隷に生れ、旦那方の奴隷として生涯を過した。だが今、もし万能の父が死を恵んでくださるとすれば、私は永遠に神の下僕になれる！」(XVII, 271)と言って死んでいった。このアンヌシカとマヴルーシャとは極めて対照的ではあるが、いずれにせよ農奴のあわれむべき死をいたむ作者の心境が、これらの描写の裏にひそんでいるように思われる。

第22章『不幸なマトリョンカ』では、旦那と農奴の相異を嘆き、「彼らは何をやっても法度を受けることがなく、意のままに暮している。それに彼らは自分の利益になるように法律を定めている」(XVII, 300-301)と述べ、さらに、「ああ！農奴には無法よりほかには何らの法律も与えられていない。無法の刻印をおされてこの世に現れ、それを背負って墓場へ行かねばならない。ただあの世の果てでだけ、アンヌシカの信仰のように、農奴のためにキリストの永遠の光が輝いているのである……ああ、アンヌシカよ、アンヌシカよ！」(XVII, 301)と、万

感をこめた嘆声に注目したい。

第26章『地主仲間』以下は、農奴解放前の中小地主たちと、解放後の彼らのあわれな末路を描いている。たとえば、第28章『模範的な主人』から若干引用してみよう。ここではもはや作者の幼年期の回想ではなく、農奴解放も間近かな50年代のころとなっている。

もし近ごろ現れた幻想を信ずるとすれば聖書を信ずることもやめなければならなくなるであろう。聖書にはまさしく、奴隷よ、主人たちに服従せよ！とされている。しかもアブラハムの所にも、そのほかの家長の所にも奴隷はいたが、奴隷たちは神のお気に召すことができた。実際、空虚な揚言のために信仰をも破り、父祖の遺言を辱かしめることが許さるべきだろうか？ 何のためだろう？ すべては暗く、すべてが不明な、ぽっかりと口をあけた深淵へまっしぐらに飛びこむためなのだろうか？ (XVII, 396)。

模範的な地主プストチェーロフは、彼にとって不動の真理であったはずの、聖書に書かれている真理がくつがえり、亡びて行くのである。

以上概観したように、農奴たちと地主たちの宗教観を、物語の形式で淡々と筆を運びながら浮きぼりにしており、本章の最初に紹介した A. M. スカビチェフスキーの見方がいかに見当はずれであるかが判明するのである。作者の愛、人道主義は否定できないにしても、少なくとも死期が迫ったからといって、生々しい時事問題から離れたと見るのはあまりにも皮相な見方である。他の作品にくらべて宗教的表現が多く、一見大衆を迷わす似非宗教を作中人物に説かせているかのように受けとられそうであるが、慎重な読者はむしろ、迷蒙に陥った人々への深い同情と、強烈な体制批判を読みとるであろう。

ここでふたたび福音書との最初の出会い、「再生の光」とのめぐり合いをふりかえってみるとわかるように、この作品『僻地の旧習』は「根と実」が混淆した白鳥の歌であって、過去を想起しながら現在を批判し、未来を憂うる²⁰ シチェドリソフ文学の集大成と言えよう。

(1979年5月7日稿)

註

1. 札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』1979年, Vol. 12, No. 2 および 1979年, Vol. 13, No. 1, 『セルゲイ・アクサーコフの文学と人』参照。
2. この姓は、「安布地仕立ての」「平常の、日常の」という意味の形容詞で、この姓を名乗る主人公の伝記で語られる内容が、上流貴族ではなくて地方のごくありふれた貴族の風俗であることを示している。本来は18世紀のヤロスラフの織物製造販売商人の姓で、これからザトラペーズ（安物の粗布）という名称が生れた。シチェドリソフの母の実家がモスクワの商家ザペーリン家であったことからこの姓を用いた。
3. ローマ数字は Собрание сочинений М. Е. Салтыкова-Щедрина в 20-ти томах, Худож. лит., М., 1965-1977 の巻数を, アラビア数字はページ数を示す。
4. 1888年4月26日付 Н. А. ペロゴローヴィーあての手紙。
5. «и корни и плоды жизни сатирика». Н. К. Михайловский, соч., т. V. СПб., 1897, стр. 235.
6. «сжатый, сильный, настоящий язык». Лит. наследство, т. 13-14, стр. 385.
7. 1883年8月 Г. З. Эрисер-Эфあての手紙。
8. たとえば «Новости и Биржевая газета», 1888, 15 сентября, № 225.
9. 『隠れ家モンレポ』第1章。
10. М. Е. Салтыков-Щедрин, В воспоминаниях современников, т. 2, изд. второе, М., Худож. лит., 1975, стр. 317.

11. С. Макашин, Салтыков-Щедрин, Биография 1, изд. второе, Худож. лит., М., 1951, стр. 86 に関連して.
12. Там же, стр. 83. «Все было именно так, как он писал в своей статье».
13. А. Пыпин, Салтыков Михаил Евграфович («Русский биографический словарь»).
- «Едва ли сомнительно, что он рассказывает личный опыт».
14. W. ヴェイドレ著. 山本俊朗, 野村文保, 田代裕共訳『ロシア文化の運命』, 昭和47年, 冬樹社発行, p. 242.
15. Ibid, p. 242.
16. Ibid, p. 243.
17. 札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』1979年, Vol. 12, No. 2, p. 105, p. 107.
18. Н. Денисюк. Критическая литература о произведениях Салтыкова-Щедрина, вып. V. М., 1905, стр. 155.
19. В. Кирпотин, Михаил Евграфович Салтыков-Щедрин, Жизнь и творчество, изд. переработанное, Сов. писатель, М., 1955, стр. 556.
20. 本作品の各章がほとんど過去について語っているのに, 第6章『子供たち』だけは現在と, 特に未来について多く語っている. この章は当初独立した一篇として執筆したもので, 語り手ニコノール・ザトラペーズヌイーの仮面をぬいで, 一人称で語った, 未来にむけての遺言ともいうべき内容が多い. (XVII, 72-73 参照).

主 要 参 考 文 献

- Собрание сочинений М. Е. Салтыкова-Щедрина в 20-ти томах, Худож. лит., том 17, М., 1975.
- С. Макашин, Салтыков-Щедрин, Биография 1, изд. второе, дополненное, Худож. лит., М., 1951.
- В. Кирпотин, Михаил Евграфович Салтыков-Щедрин, Жизнь и творчество, изд. переработанное, Сов. писатель, М., 1955.
- В. Я. Кирпотин, Филосовские и эстетические взгляды Салтыкова-Щедрина, Полит. лит., М., 1957.
- Я. Эльсберг, Салтыков-Щедрин, Жизнь и творчество, Худож. лит., М., 1953.
- М. Е. Салтыков-Щедрин в воспоминаниях современников, в двух томах, изд. второе, пересмотренное и дополненное, т. 2, Худож. лит., М., 1975.
- Литературное наследство, т. 13-14, М., 1934.
- Nikander Strelsky, Saltykov and the Russian Squire, AMS Press, Inc., New York, 1966.
- 西尾章二訳『僻地の旧習』(一)(二)(三), 世界古典文庫, 日本評論社, 昭和23年—25年.